



# テロの標的で堪忍袋が切れたか 印。パ問題で試されるモディの力量

インド・ビジネス・センター代表 島田卓



## パキスタン空爆 モディの過激な対応

シエークスピアの言葉に「傑作は混沌から生まれる」がある。いまインドのモディ首相は混沌から傑作（秩序）を生み出そうと懸命だ。二月二六日、領有権を争うインド北部カシミール地方のパキスタン支配地への空爆も、そういった状況打破への回答の一つだ。同地区では一四日に自爆テロが発生、インド中央予備警察隊四〇人超が殺害された。

インドは抑圧され続けた民族でありながら他国への侵略をしたことのない歴史を持つ。そのインドが、ついにやってしまったか、というのが率直な感想だ。国内支持基盤の地盤沈下に悩むモディが、



モディ首相

数カ月後に迫った総選挙を勝ち抜くために放った窮余の策、という見方もあるが、ことはそれほど単純ではない。

彼が直面している現状は尋常ではないからだ。これまでインドは嫌という程、パキスタンのテロ組織に痛めつけられてきた。米メリーランド大学の世界テロリズム・データベースによれば、インドは一九七〇年以降四〇〇〇件以上のテロ攻撃に見舞われており、死者数も相当数に上る。

一例が二〇一一年二月一三日

に起こったインド国会襲撃だ。国会敷地内に侵入した数人の武装集団が警備部隊と銃撃戦を展開、侵入者五人全員が死亡、合計一二人の死者と二〇人以上のけが人が出た。インド政府は事件翌日、パキスタンに本拠を持つテロ組織ラシユカレ・イ・トイバ（LeT）の犯行と断定、パキスタン政府に対し組織の活動阻止、指導者の拘束と組織の資産凍結を申し入れた。そして同月二六日には、当時のパウエル米国防長官が、カシミール地方を拠点とするパキスタンの過激派組織である「ラシユカレ・イ・トイバ」と「ジェイシモハメド」の二団体を米国内法に基づき新たに「海外テロ組織」に指定した。

さらに最悪の悲劇が二〇〇八年

一月二六日に起きる。国際社会を震撼させたインド最大の商業都市ムンバイでの無差別同時多発テロだ。パキスタンの商都カラチからボートでムンバイに向かった武装グループによる無差別襲撃で、日本人を含む多くの外国人が犠牲となり、死者は一六四人に上った。昨年公開された「ジェノサイド・ホテル」はこの事件をモチーフにし、特に被害の大きかった最高級ホテル「タージマール」での四日間、事件に巻き込まれた人々の恐怖と絶望を描き出している。

この無差別テロに対し、当時のインドのムカジー外相はパキスタンのクレシ外相に「激怒」を伝え、パキスタン軍統合情報部（ISI）長官のインド派遣と、LeTを始め過激派幹部二〇名のリストを提

示し、インド側に引き渡しを迫った。が、予想通りパキスタン側は事件関与を否定すると共に、インド側要求を突っぱねた。

同襲撃に加わり、唯一生き残ったまま、インドに身柄を拘束された若者の証言はこうだ。「イスラムのお祭りのため新しいシャツが欲しいと父親にねだったが、そんな金はない、とつれない。その時、タリバン（アフガニスタンを拠点としていたが、米軍によりパキスタンに追いやられた）の兵士から、我々に加わりジハード（聖戦）に参加すれば家族は当分不自由しないと勧誘され、二年間の戦闘訓練を受けて今回の襲撃に加わった」——もちろんパキスタンは、インド政府のでっち上げた話で何の根拠もない、と歯牙にもかけなかった。

## 過激派はパ軍の味方 モディ最後の賭けは？

インドは一九四七年の独立以来クーデターによる政変はなく、アジアでも類まれな文民統制の国で、軍は一切政治に関与できない体制

になっている。

これに対してパキスタンは、首相は大統領に呪まれ、大統領は軍に呪まれる三すくみで、クーデターも起こる国だ。従ってパキスタンにはシビリアンコントロールという言葉が見当たらない。パキスタンでは軍が自国政治の支配権を握り続けるために隣国インドとの間で時折問題を起こす必要がある、その手先としてLeTなどがテロに走ることになる。過激派組織を鎮圧しようとする理由だ。表面きはテロ防止やインドとの対話を呼びかけるなどと言ってはいるが、テロ組織撲滅など実行できるはずはない。

問題を複雑にするのは、そんなパキスタンの米政府とは協調路線も取ることだ。

八〇年代の「レーガン・ルー」に則り、当時米中央情報局（CIA）はサウジアラビアと組んでISIに資金と武器を供与、アフガニスタンに侵攻したソ連軍と戦うイスラム・ゲリラ組織ムジャヒディンを支援した。八九年ソ連

が瓦解、アメリカがアフガニスタンから撤退すると同地域は実質的な無政府状態となり、テロ組織の温床と化した。それを率いた人物ビンラディンは二〇一一年五月二日未明、パキスタンの首都近郊のアボタバードにある同国士官学校と目と鼻の先の潜伏先邸宅で米特殊部隊により殺害された。その裏には米パの密約があったとされる。

当時のパキスタンのザルダリ大統領は「ジェロニモ（ビンラディンの暗号名）暗殺計画」を知っていた。その際、その見返りに駐米パキスタン大使であったフセイ・ン・ハッカニを使い、マイク・マレン米統合参謀本部議長（当時）に、パキスタン軍によるクーデター阻止を要請したメモが暴露されてしまった（メモゲート事件）のだ。ビンラディン殺害の直後だ。

そもそもビンラディンの隠れ家周辺は士官学校が所在する飛行禁止区域。ステルス機能のないヘリコプターを使った米軍特殊部隊の現場突入はパキスタン高官の了解がなければ不可能だ。ハッカニは

その後、同メモ発覚の責任を取られる形で辞任している。軍の圧力があつたことは否めず、パキスタンにおける軍の隠然とした力を見せつけた。

実質的軍政下にあるパキスタンの現カーン首相（レジェンドと言われる元クリケット選手）は、モディとの電話会談を希望したが、モディは拒否した。ここに至る経緯を冷静に考えれば、極めて当然の帰結と言える。

一方、首相就任後、外交に多くのカネと時間を費やしてきたモディだが、国内経済発展は疎かになつた。その結果が、総選挙を前にした州議会選挙での大敗だ。一般市民、就中・就労人口の過半を占める農業従事者から疑問符を突き付けられたモディが、パキスタンによるテロ攻撃を機に、我に返り、ピラミッドのボトム的重要性を再認識したとしたら、瓢箪から駒だ。その駒を、残されたわずかな時間でどこまで使いこなせるか。彼の力量を計ることができる。

（敬称略）